

平成 23年 6月 23日現在

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21830096

研究課題名（和文） かな文字習得の特殊表記の習得機序の解明と習得支援法の開発

研究課題名（英文）A study of Japanese children's learning processes of special notations of kana syllabary, and development of its instructional methods.

研究代表者

垣花 真一郎 (KAKIHANA SHINICHIRO)

郡山女子大学・家政学部・講師

研究者番号：00550724

研究成果の概要（和文）：子どもの濁音文字（「が」など）、拗音表記（「きゃ」など）の読み習得の支援法を検討した。具体的には、濁音文字については、清濁の対比的関係を強調した歌、拗音表記については、前部音と後部音が混成されることを盛り込んだ歌を作成し、これら子どもへの歌の活動に取り入れ、読み習得促進効果が得られるかを検討した。濁音については 3-4 歳児を対象に、拗音については 4-5 歳児を対象に、約半年間、2 週間に一度程度これらの歌の活動を行ったが、事後においては特殊表記習得への効果は検出されなかった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to clarify the mechanisms of how Japanese young children learn to read voiced kana letters (letters with daku-on diacritics) and letter combinations (yo-on combinations), and to develop instructional methods of each of the notations. We wrote two songs aiming to foster child's phonological skills which were supposed to be necessary for mastering the notations. A chorus program including a song emphasizing voiced-voiceless comparison was given to three-to-four-year-olds, and the song emphasizing blending of two sounds was given to four-to-five-year-olds, both once every two weeks. After six months, former group was compared with a control group on the score of daku-on letters reading test, and latter was compared with a control group on the score of yo-on combination reading test. Results of the post test showed that there is no effect of the song programs for mastering the each of the notations.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,210,000	363,000	1,573,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,510,000	753,000	3,263,000

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：読み習得、かな文字、拗音表記、濁音文字、幼児

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

かな文字は、文字と音節（厳密にはモーラ）が1対1に対応する音節文字である。音節文字は文字に対応する音の単位が粗い。このため、アルファベットに比べて圧倒的に多くの文字を必要とする（Gelb, 1963）。実際、日本語には100種を超える音節があるが、平仮名にはそれに対応した100種余りの文字・表記が存在する。子どもは習得開始から2年余りをかけてこれを習得するのである。しかも、そのほとんどは音節意識の発達以降のことである。したがって、かな文字の習得研究の主要な課題は、子どもがそれらをどのように覚えているかを解明すること、また、その習得を支援する手立てを考案することであるといえる。

かな文字は、上述のように音節文字であるが、その中にはこの原則から外れたものがある。1つは「だ」や「ば」など符号のあるものである。これらは、文字と符号が合わさって1つの音節を表している。また、もう1つは「きゃ」などの拗音表記である。これも2文字=1音節となっている点でかな文字の原則から外れている。これらは、音節文字の基本から外れていることから「特殊表記」と呼ばれている。

実は、発達障害児など、かな文字の習得に困難を示す者の多くは、この特殊表記の読み書きに困難をもつ。菊地（1995）は、濁音、半濁音文字の読み書きに困難をもつ事例を報告している。大六（2000）は、拗音表記の読み書きに困難をもつ自閉症児の事例を報告している。また、特殊表記は、一般的にも習得されるのが遅い。子どもは3歳の終わり頃からかな文字を読み始めるが、濁音文字は4歳半から5歳頃に習得され、拗音表記は6歳でも正答率は66%程度である（島村・三神, 1994）。このことは発達障害児以外にも相当数の者が、就学後も特殊表記に困難をもつことを示唆している。こうした事実を、特殊表記に関して、就学前教育において、何らかの習得支援策を講じる必要性を示唆している。

濁音文字の濁点は、「音を濁らせる」（有声化）ということを表している。子どもは、濁音文字の音を丸覚えしているのではなく、この規則を利用して習得していると考えられている。垣花（2005）は4歳児に対し、文字型の図形（X）を「これはpaと読みます」と提示し、次に、それに濁点のついたもの（X'）を読ませた。pを有声化するとbとなるので、これにbaと答えれば「濁点の意味」を理解していることになる。結果、参加児の9割近くがこの問題に正答した。

一方、拗音表記は、前部と後部の音の「混成」を表す表記である（たとえば、きゃ:ki+ya

→kya）。垣花（2008）は、5歳児に文字型の図形（X）をdiとして提示し「Xゅ」の読みを尋ねた。混成の規則に従えば、これはdyuと読むのが正解となる。この実験の結果、8割を超える子どもがこれに正解した。このことは、先述と同様、子どもは「規則の適用」によって拗音表記を習得していることを示唆している。

ここから、特殊表記の習得支援法とは、文字・表記とその音価を対提示し「覚えさせる」ことではないということが分かる。必要なのは濁点や拗音表記の意味・規則を理解させることだといえよう。

2. 研究の目的

本研究では、歌・リズム遊びを通して特殊表記習得の準備性を養う支援法を提案し、その有効性を検証する。これは、言葉の感覚や音感を通じて、特殊表記の習得に必要な「音の操作」の技能を伸ばそうというものである。まず、濁音文字の習得のためには、「有声化（音を濁らせる）」という操作の技能を養うことが必要である。そこで、ここでは擬音語における清濁の対立（荻阪, 1999）を利用する。擬音語・擬態語が清音から濁音に変わると、対象物が大きく・重く感じられる（たとえば、コロコロ→ゴロゴロ）。歌の歌詞にこれを盛り込むことで、清濁の対立関係の感覚を養おうというのである。さらに、ここに音程の高低などを重ねることで、幼児のもつ音感の助けも利用する。

次に、拗音表記についてである。拗音表記においては、「音の混成」という操作が必要になる。ここでは、子どもの知的好奇心を刺激する方法を用いる。拗音表記においては、2つのものが合体し、別の1つのものに変化する。歌詞にこれを盛り込み、予測させることで、子どもの知的好奇心を喚起しようとするものである（たとえば、ニ+ヤ→ニャー（ネコ））。本研究は、そうした歌・リズム遊びを提案し、その効果を検証することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 調査対象

郡山女子大学付属幼稚園の幼児を対象とした。以下に濁音文字習得支援プログラム、拗音表記支援プログラム、それぞれの対象児について述べる。

① 濁音文字習得支援プログラム

濁音文字習得支援プログラムに関しては3歳児クラスの子ども18名を対象とした。これを実験群9名（男児4名、女児5名、年齢3;4-4;2）、統制群9名（男児4名、女児5名、年齢3;4-4;2）に分けた。

② 拗音表記習得支援プログラム

拗音表記習得支援プログラムに関して4歳児クラスの子ども20名を対象とした。これを実験群10名(男児5名, 女児5名, 年齢4;4-5;1), 統制群10名(男児5名, 女児5名, 年齢4;3-5;1)に分けた。

(2) 調査時期

① 事前調査

2010年6月中旬に, 実験群, 統制群の両群に読字調査などの事前調査を実施した。

② 歌のプログラム

同年6月末から実験群に対して2週間に1度程度, 歌のプログラムを実施した。

③ 事後検査

同年12月に事後検査を実施した。

(3) 事前検査・事後検査の実施項目

① 濁音文字習得支援プログラム

事前調査では, 実験群・統制群双方に対して, 直音71字の読み検査(国立国語研究所, 1972)と絵画語彙検査(上野・名越・小貫, 2008)を実施した。事後検査では, 読み検査のみを実施した。

② 拗音表記習得支援プログラム

事前調査では, 実験群・統制群双方に対して, 46字の清音文字・21個の清拗音表記の読み検査, 絵画語彙検査(上野・名越・小貫, 2008)を実施した。事後検査では読み検査のみを実施した。

(4) 歌による支援プログラム

① 濁音文字習得支援プログラム

濁音文字習得支援実験の実験群に関しては図1のような歌を考案し, これを, 放課後に実験群を対象に行われる歌の特別活動の一部として実施した。活動全体は40分程度で, 濁音の歌はこの中で2回唱和し, 時間としては10分程度とした。



図1 濁音文字習得支援プログラムの歌

② 拗音表記習得支援プログラム

拗音表記習得支援実験の実験群に関しては図2のような歌を考案し, これを, 放課後に実験群を対象に行われる歌の特別活動の一部として実施した。活動全体は40分程度で, 拗音の歌はこの中で2回唱和し, 時間としては10分程度とした。



図2 拗音表記習得支援プログラムの歌

4. 研究成果

以下に濁音文字習得支援研究, 拗音表記習得支援研究それぞれについて結果を述べる。

(1) 濁音文字習得支援の結果について

事前検査の結果は, 濁音文字については実験群が2.00個(SD=6.00)統制群が1.11個(SD=3.33)であり, 事後検査は実験群が6.78個(SD=8.38), 統制群が6.89個(SD=7.96)だった。事前検査の正答個数を共変量とし, 事後検査の正答個数を従属変数とした共分散分析を行ったが, 群間に有意な差は見られなかった($p > .10$)。つまり, 支援プログラムの効果は検出されなかった。

(2) 拗音表記習得支援の結果について

事前検査の結果は, 拗音表記については実験群が3.60個(SD=7.60)統制群が2.70個(SD=6.62)であり, 事後検査は実験群が6.20個(SD=9.05), 統制群が8.70個(SD=9.75)だった。事前検査時の拗音表記の正答個数を共変量とし, 事後検査の正答個数を従属変数とした共分散分析を行ったが, 両群間に有意差は検出されなかった($p > .10$)。つまり, 歌のプログラムの効果は検出されなかった。

本研究では, 読み習得自体への効果は検出されなかった。これは, 参加児の人数が十分でなかったこと, また, プログラムの実施頻

度が低かったことなどが原因であると考えられる。ただし、プログラム実施時の子どもの参加意欲は高く、自宅でも覚えて歌っている等の報告もあり、幼児への適合性は確認できたといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

① 垣花真一郎、安藤寿康、小山麻紀、飯高晶子、菅原いつみ、幼児のかな識字能力の認知的規定因，教育心理学研究，査読有、57巻，2009，295-308.

〔学会発表〕(計1件)

① 垣花真一郎、三瓶令子，歌・リズム遊びを用いた濁音文字の読み習得支援，日本発達心理学会 22 回大会

〔図書〕(計1件)

①「垣花真一郎 言葉一話し言葉から書き言葉へ（中道圭人・榎本淳子編 「幼児・児童の発達心理学」 ナカニシヤ出版所収），2011，pp.77-89

6. 研究組織

(1) 研究代表者

垣花 真一郎 (KAKIHANA SHINICHIRO)

郡山女子大学・家政学部・講師

研究者番号：00550724

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：